

1. 憧れの人

黒いロングコートを身に纏い、威風堂々と指揮をとる長身の男性。そんな彼が、張りのある低音で指示を出す。

すると揃いの上着を着た部下達が、一斉に強盗犯に飛び掛かった。あっという間に鎮圧し、拘束する。

それでも厳しく犯人を捉える金色の瞳。

束ねられた長い銀髪が風でなびき、団服の裾がひらめく。

無力化された犯人が喚く声が、辺りに響いている。

それを耳にしながら、そのお方は呆れたように溜め息を吐いた。

たまたま一連の流れを目撃した私は、ぽかんと口を開けて見惚れている。

平和なこの街で、こんな物騒な事件に遭遇したのが初めてなのも

あるのだろう。

衝撃を受け、日々の平和の礎を知った。

私達が毎日を何事も無く過ごせているのは、この方々がいてくれてこそなのだ。

私がある意味でショックを受けている中でも、騒ぎに乗じておかしな行動をする人がいないか、そう警戒して。その人は鋭い視線でぐるりと周囲を見渡していた。

そしてその双眸がこちらを見た瞬間。

私達はバチリと、視線を交差させた。

鼓動がドクンと跳ね、次第にドクドクと駆けていく。

どこからどう見ても逞しい成人男性なのに――

私はその人のこと美しいなと、そう思った。

ここは、とある王国にあるフォードという都市。

周りをぐるっと石の壁に囲われた、円形の街だ。

中央の高台には王が住まう城もある、大陸一の大都市である。

そんな街だが、王国騎士団が民を守ろうとするには、些か栄え過ぎた。犯罪を抑圧して回るにはいつでも人手が足りず、しかも国勤めの騎士となるには厳しい条件がある。

更には街の外では、度々魔物が出没するときた。

それらが街に入らぬようと警戒するだけでも騎士はいっぱいっばい。

よってそういった問題を解決するべく。国は、百年ほど前から都市で自警団が活動することを認めることにした。

しかしそうは言っても、自警団として活動を始めるのは、簡単な

ことじゃない。

何より自警団として活動するためには国に認めて貰う必要があって、そのためにはこまごまとしていてややこしくも面倒な、手続きと申請が必要なのだ。

その上定期的に監査も入るし、不正や職権乱用は絶対に容認されない。当然、既に他の自警団が管轄しているエリアに、新規の自警団が侵食してくるなんてもつてのほかだ。

よってこの大都市、フォードには四つの自警団が存在し、円形である街を綺麗に四分割して、各団で治安を守っていた。

中央にでーんとある王城は、騎士の管轄だ。それと、都市をぐるっと囲う石の壁も、東西南北に存在する四つの門も。

この都市では、騎士と自警団が円滑なコミュニケーションをとることも、人々の平和に繋がっていた。

富裕層が暮らす民家や、教会の本拠地である神殿がある北地区。

酒場やオトナなお店など様々なお店が集う歓楽街の西地区。

商店街や学校、旅行者向けの宿泊施設が集まる東地区。

そして、一般市民から貧困層までが暮らす南地区。

私は、その南地区の治安を守るブレイブリー自警団の団員だ。

団員のトレードマークである黒のロングコートを身に纏い、日夜
仕事に励んでいる。

得意な戦闘スタイルは魔術。後衛型なので、離れたところから味
方に当てないようにと注意して攻撃をするのだ。

——そう、攻撃。我らは戦う。けれどそれは、人間相手じゃない。
もちろん我らがブレイブリー自警団は担当地区の警ら、犯罪行為
への鎮圧、抑制、犯罪者の捕獲に尽力している。

しかしそれに加えて、腕が立つものが多いことから都市近くに出没した魔物の討伐業も請け負っているのだ。

今日も、大きなヒトガタの魔物を見たと言う通報を受けて。都市から少し離れたところにある森を探索し、見つけたオーガを倒してきた。

オーガとは別名『緑の巨人』と呼ばれ、緑色の肌に一軒家ほどの背丈、それから木のように太い腕をしている。

そんな図体で木を引っっこ抜いて振り回すものだから、今日の討伐任務は、なかなか大変だった。

剣と魔術の腕前が達人級である我らが団長様も、指揮を執るのではなく率先して戦ったくらいなのだ。

もし今日倒せていなかったら、きつと近い内に甚大な被害が出ていたことだろう。

だってヤツは、我らが視界に入っただけで敵意を剥き出しにして、暴れ出したのだから。

オーガとは、凶暴な性格で知能の低い魔物である。

暴れ出したら全てを薙ぎ倒してからやっとなんと落ち着くような、それはそれは危険な生物なのだ。

噂程度の報告でも『気のせい』と流すのではなく、隊を組んで探索に出掛けると宣言した団長の決断力が素晴らしい。

その甲斐あって早期発見と、早期対象が出来た。

それはそれはもう、大手柄だったのだ。

うちの自警団と発見報告をした民間人に、国から褒賞金が出るらしい。

討伐に参加した団員には依頼の成功報酬の分配があるのだが、それに加えてボーナスも出るとのことだ。

それは今回討伐に参加していない団員にも配られるが、参加していた団員には色が付いているとか。臨時収入で団員全員がウハウハ。その上で怪我人も死傷者も、一人もいない。こんなにめでたいことはそうそうないのだ。

——と言うことで。隊を組んで共に戦った私含めて十五人の団員は、現在祝杯のどんちゃん騒ぎの真っ只中である。

団でよく使う南地区の庶民派酒場を貸し切りにして。私達は安くてうまい酒をかつくらい、美味くて量の多いつまみを手に、ガハハと笑いながら大騒ぎしている。

そんな賑やかな会場の中で、私は壁を左にして隅っこの席に座っていた。

右手に木製のジョッキを持ち、今日もよく頑張った！と自分を褒めながら、冷えたエールで喉を潤わしている。

更には左手に持った鶏肉の串にかぶり付き、満面の笑みでもぐもぐと咀嚼するのだ。

「……おい、飲み過ぎじゃないか？」

「む……っ？」

右から伸びてきた大きな手に、口の端に垂れた鳥の油を拭われる。視線でその腕を辿れば、おおっ今日もめっちゃ太い！と感動した。ムキムキ筋肉。筋肉ムキムキ。素晴らしい。ムキムキはいいものだ。とってもいいものだ。

ウンウンと頷いて納得していた私はしかし、ふと気付く。

（何か今、口の端を拭われたような……？）

かなり遅れてからハツとして。私はむむっと眉間に皺を寄せた。お手を煩わせてしまつて申し訳ない。そう思いながら撫でられた場所をペロリと舐めれば、美味しい味がした。

「アデリー？そろそろ飲むのは止めたらどうだ？」

「……はっ！ら、らいじょおぶですよお！まだまだいけますっ！」

そう言えば質問されていたんだったと思い出して、慌てて弁明する。ジョッキを掲げて叫べば、周りから歓声が上がった。

いいぞアデリー！グイツといけアデリー！

「まーかしとけーい！」

串を持った手でドンツと胸を叩いて、私は立ち上がった。

テーブルにピツと飛んだ油を、眉間に皺を寄せた彼が布巾で吹いてくれている。

左の腰に触れていた温かな手が、自然と離れていく。

それをほんのりと寂しく思いながらも、私は半分ほど残っていたエールをグイツと呷った。

しゅわしゅわとした炭酸が喉を通り抜け、全て飲み下すとふはあ

っ！と盛大に息を吐く。

「おかわりー！」

「おいおい」

割れんばかりの歓声。仲間達の弾けんばかりの笑顔。明るい笑い声。

うんうん、よかったよかったと笑いながら椅子に座り直すと、左の腰へ控え目に、また熱い手が触れる。

そして横からそつと、ジョッキを奪われた。

「あう……？わたしのおしゃけ……」

「ああ、こつちだ」

「んん……？じょうりゅうしゅ……？」

そんな高価なおしゃけがここに……？と首を傾げながら、私は差し出されたジョッキに並々注がれている透明な液体の匂いを嗅ぐ。

「わかんない……」

「はは、そうかそうか」

大分酒が回っているのか、匂いがまるで分からなかった。それに拗ねていると、腰に触れていた手が私の左手を取り、串を右側に移動させていく。

「……ん、うまいな」

「だんちよー、それ私のお」

人の手から人の食べかけの鳥串を食べた、我らが団長様。チラツとこちらを窺い見た金の瞳を、私はキツと睨む。

すると何故だか彼は、嬉しそうに笑み崩れた。

「ほしかったんだ。別にいいだろう？」

「んー……」

おどけて、甘えて、すり寄って。指の間を硬い指の腹でスリスリ

と撫でられていると、至近距離にあった彼の左足が、私の右足にぴたりとくつついた。

「それも、ほしい。なあ、飲ませてくれよ」

「……もー、仕方ないですねえ」

この蒸留酒は、団長がくれたものだ。

今の私には飲んでも味が分からないけど、すーっと体に浸透していく感じからしてきつと高価なものなのだろう。

独り占めは良くないか、と私は彼の口許にジョッキを当てた。

ゴク、ゴク。逞しい首の中心。ぼこりと出た喉仏が上下している。

その光景は、なんだか淫靡に見えた。

「ん。美味かった。嫌がらずにくれて、ありがとうな。物凄く嬉しいよ」

「は、はあい……」

左手から離れた彼の左手が、スリスリと太ももを撫でる。

ここでまた窺うような視線を向けられたが、私はそっと目を反らして鶏肉にかぶりついた。

まるで、安心したような——静かに息を吐く音。

私はよく分からない彼の反応に首を傾げながらも、お腹の奥がキユンとしてしまつて。もぞもぞと膝を、擦り合わせていた。

（お酒が入ると、えっちな気分になつちやう……）

それはきつと、この人も同じなのだろう。

距離が近いのは最近だとままだが、お酒が入ると尚更それが顕著になる——のかもしれない。

最早ゼロ距離と言つても過言ではない。

その上で大きな体をこちらに向けて座っているせいで、私の席は半分個室と化している。

立ち上がらなければ、他の団員の姿が見えない。

「ん、んっ」

スリスリ、スリスリ。太ももが絶えず撫でられている。

チラリと彼の顔を窺い見れば、大きな口の端が緩く持ち上げられていた。何だか物凄く、機嫌が良さそうだ。

「……嫌じゃ、ないんだろう？」

「……………」

思わずコクリと頷くと、彼の機嫌が更に上向きになった。

鼻唄でも歌いそうな状態で、もつと擦り寄って来る。

——でも。

これは、おかしいことではないのだろうか。だって、恋人同士でもないのに。

だめなことだと思うのに、だんだんとよく分からなくなってくる。

「どうした？ 言いたいことがあるなら、きちんと言うんだ。例えば——ここじゃイヤ、だとか」

「う、い、いえ……っ」

チラリと団長の目が、入り口近くにある階段を見た。

その先は二階に繋がっていて——二階には有料の宿泊部屋がある。酔って帰ることが難しくなった客が主に利用するのだが、それ以外の用途でもよく利用される、とのことだ。

「……っ」

「はは……」

ふるふるとかぶりを振れば、彼は眉尻を下げて笑った。

そしてどこか縋るような視線をこちらに向けながら、問うように首を傾げる。

それに対しても、私は首を横に振るばかり。

すると団長は、諦めたようにそつと息を吐いた。

「……じゃあ、ココがいいんだ？」

「そういう、わけじゃ……っ」

気を取り直したように意地悪く笑って。彼の左手が、やたらねちっこく太ももを撫でる。

でも、嫌じゃないんだろう？と再び問いかけられても、今度は答えられない。戸惑いが、加速していく。

（な、なんで、こんな……っ）

こんなこと、今まで一度もなかった。

こんな風に体に触れられることなんて、今まで一度も。

それなのに今は、人差し指でつう……っつと、服の上から肌を撫でられている。

ビクンと跳ねた腰。右足に、ブーツを履いた彼の足が絡み付いた。

「……っ、はぁ……っ」

「どうした？ 飲みすぎて苦しいか？——休憩、するか？」

「あ……っ」

右耳に甘ったるく囁きかけられて、ぎゅうっと体内が引き絞る。
線を書くように擦られる太もも。

ジクジクと蕩けて、奥から熱いものが——

「団長っ！」

「……っ！」

「………」

突然横から大きな声がして、私はハッと顔を上げた。

じんわりと滲んでいた涙を瞬きで掻き消し、慌てて手にしたままの鳥串に齧り付く。冷めて固くなつた肉を噛み砕きながら、私はグルグルと目を回していた。

「……どうした？」

団長はふーっと息を吐いてから、団員の方に顔を向けた。

彼の落ち着けた声には、それでも僅かに苛立ちが滲み出ている。

こんな声、聞いたこと無い。私がそうドキリとしたのに、若い新人団員は気付いていないのか、澆刺と言葉を続ける。

「二次会行こうってなってるんすけど、団長もどうっすか!？」

「あー……いや、俺は毎回一次会だけ参加するようにしているんだ。ある程度なら経費で落ちるから、お前らだけで楽しんで来い」

そうっすか……と残念そうに呟いた新人くんの目が、次はこちらに向く。バツチリと目が合ってしまった私は、パチリと瞬いた。

「じゃあアデリーさん、いでえっ!？」

「おま、バカッ!こっちに来いっ!」

背後から別の団員に頭を叩かれた新人くんが、ブーブー言いなが

らも引きずられていく。

私はホッと息を吐いて、そろりと右に視線を向けた。

「……………」

そこには右手でクシヤツと銀の前髪を握り込んで、斜め下に視線を落とす団長が居た。鋭い視線、への字に曲がった口許。

葛藤か、不快感か、苛立ちか。その感情の色は分からないが、少なくとも機嫌が良いわけではなさそうだ。

そんな彼の姿を見ていると——最近ではめっきりと大きくなってしまった予感が、また顔を出す。

（やっぱり団長、私のことが好きなのかなあ……）

だとしたら両想いだな、なんて思いながら。

私はここ数ヶ月続いている彼との煮え切らない関係に、そわりと身動いだ。

* * *

結局それ以上は何も起きないまま。私は団長に送られて詰め所と同じ敷地内にある、自警団の寮に帰って来た。

ドサリと仰向けに寝台へ寝転び、白い天井を見上げる。

男性寮と違って、女性寮は一人部屋だ。

——と、言うより事務員を除いて、女性団員は私だけなのである。事務員は寮に入っていないし、女性寮に住んでいるのは私だけだ。当然、女性寮は部屋数も少ない。

南地区担当の自警団はとことん実力主義。

そして粗野な男が多いと言うことで、女性人気は無——というよりは『死』だ。死んでいる。

(団長……私と、どうなりたいんだろぅなあ……)

質実剛健、公明正大。面倒見が良く、正義感が強く、それでいて物理でも魔術でもめちゃくちやに強い。

その上で逞しい肉体と、非常に整ったお顔をお持ちな方である。そんな人相手に自惚れるなんて恥ずかしい。そう思いながらも、私はここふた月ほどずっと、同じことを繰り返している。

私のことが好きなのかも。いいやそんなまさか——その、繰り返しのだ。

何度期待を頭から振り払おうとしても、すぐに戻ってきてしまう。だって何より。彼は、私が魔術アカデミーで進路について迷っていた時に、心を決めるきっかけになった人だ。夢を見るなという方が、無茶なのである。

忘れもしない、三年と半年前のあの日。

南地区をぶらついていた私は、強盗逮捕の現場を偶然目撃した。

その時の、衝撃と言ったら——初恋と憧憬の感情を同時に抱き、脳天から爪先まで一直線に貫かれたようなものだった。

その結果、アカデミーの教師から反対されつつもブレイブリー自警団の門を叩いて。私は卒業と共に、ここへ入団した。

そうして二十四歳になる年に入団してから、二年と少しが経つ。

訓練生として下っ端の下っ端だった一年目は団長にほとんど会うことは無く、正式な団員となった二年目からは顔を合わせることも会話するも増えた。だが、それほど仲が深まったわけではない。

ただ、唯一の女性団員だから気にかけてもらっていたのだろう。

二年目からは度々声をかけてもらっていたし、ちょこちょこお菓子や不要な女性物の物品を貰っていた。

（だけど今年、三年目に入ってから……。そう、ふた月ほど前から段々と、距離が近くなって。髪に触れられたり、手に触れられたり、

今日なんか、なかなか凄いことをされた)

あそこまで触れられたのは、初めてだ。

腰に触れられたのだった、横を馬車が通りすぎて危ないときに、体を引き寄せてくれた時だけだった。

それなのに今日は、あんなにも密着して――

「……っ」

思い出して、ぶわりと顔が熱くなった。

今思えばあの時の私は、かなり酔っていたように思う。

でも団長は、きつとそこまで酔っていなかった。

そもそも私は、団長が酔っているところを見たことがない。

彼は私をどうしたかったのだろう。

そして私と、どうなりたかったのだろう。

酒場で階段をチラリと見た金の瞳を思い出す。

もしあの時頷いていたら——私達の関係は、一体どう、変わって
いたのだろうか。

（どうして……寂しそうな顔で、おやすみって言ったの）

部屋まで送り届けてくれた別れ際、「きちんと着替えて寝るんだ
ぞ」と言って笑った団長は、チラリと室内を見てからほんのりと寂
しそうに笑った。

部屋の中に、入れてあげたら良かったのだろうか。でもこの年で
ピツカピカな処女である私に、そんな無茶な要求はしないでほしい。
そこは、年上の彼にリードしてほしいところだ。

「はーあー」

好きなのか好きじゃないのかただの遊び気分なのか。

両想いならばいっそ、襲ってくれゝなんて考えながら。

私は着替えるのも忘れて、不貞寝をキメこんだ。

2. 自警団員の日常

早朝。まだ薄暗い時間に起きた私は、隣のシャワールームに移動した。

昨日は飲み会前に一旦帰ってきて。それから汗を流したのだが、念のためにまた綺麗になってから仕事に出ることにする。

どうせ朝にある訓練で汗だくになって、またシャワーを浴びることになるのだが。パツとしないとは言えこれでも恋する乙女なので、身綺麗にはしておきたい。

たつぷりと寝たから、昨夜のモヤモヤは晴れている。

その上で体がさっぱりするともう、気分は爽快だった。

体をタオルで拭いた私は、全裸のまま温風機を手にして動力部分に魔力を流す。

これは魔術師じゃなくとも体内に魔力があれば、誰でも簡単には扱える代物だ。しかも、この部屋備え付け。

改めて職場の福利厚生の素晴らしさに感謝をしながら、私は髪を乾かしていく。

瞬く間に水気が飛んでいき、髪の毛がふわふわになっていく。

そうして髪を乾かし終えた私は、棚に温風機を仕舞った。

すると今度は洗面台に置いている香水を手にとって、シュツと鎖骨の当たりにつける。

「んー、良い香り！」

先月、団長からいただいたものだ。

なんでも付き合いのある商家から、新作を貰ったとか。

柑橘系の香りと花の香りが上手くマッチしているもので、甘ったるさはなく爽やかで、甘酸っぱい。

私はこの香りが気に入っていて、貰ってからはいつもつけている。これで訓練中に汗を掻いても、多少は誤魔化せるだろう。

朝訓練の後にもつけようと、私は今日もこれを持っていくことに決めた。

それから私は、これまた団長に貰った可愛いブラシで髪を梳かし、
またもや団長から貰ったヘアオイルを髪に塗る。

「すべすべつやつや良い香り」

色々と女性物の貰い物をこちらに流してくれる団長に、今日も感謝感謝である。

石鹸や化粧品も彼からの貰い物で、無くなる頃に丁度同じものを頂けるから非常に助かっていた。

団長さまさま。いや、団長と付き合いのある商会さまさまか。

団で必要なものを仕入れているお店だから、あちらからしたら

我々は大お得意様なのだろうが。

私は私で、大助かりだ。

だって消耗品の多数がそうやって貰っている物なのだから。

（申し訳なくもあるんだけど。でも、ねえ……）

最初は、断ろうとしていたのだ。

でも、こちらも困っていると。断られると捨てるしかないと言われて、ずるずると貰い続けている。

団長はたいっへんモテるのに、何故だか周りに女性の気配がないのだ。事務員さんとも仕事上の会話しかしてないみたいだし。

（でも、私には……）

手に触れたり、髪の毛を詰まんでクルクルと指で遊んだり。

そういう触れ合いをしてくるんだよな、と思い出して。『やっぱり私のことが好きなんじゃ』という期待が首をもたげる。

（――って、だめだめっ！）

私はハツとして、慌ててかぶりを振った。

いけないいけない。また思考が堂々巡りするところだった。

せっかく気分よくシャワーを浴びたのに、自意識過剰かもと落ち込みたくはない。

「……まあ、感謝ってことで！」

鏡越しの自分に向けて、私は敢えて明るく笑いかけた。

ご厚意に甘え続けているのは確かだが、捨てられてしまうよりはきつといいはず。

そう自分に言い聞かせて、私は自分に向けて笑みを深める。

それから私は身支度に戻り、せかせかと準備をして、深く考えるのを止めた。

自警団の制服に着替えて寮の部屋から出ると、ジリツとした視線を感じた。

カチャリと音を立てて鍵を閉めて、私はなに食わぬ顔で廊下を歩いて行く。

最初は見られているような感覚に、やたらとビクついたものだ。けれど随分と前に団長に相談し、その正体を教えてもらってから
は恐れなくなった。

なんでも女性寮の廊下や建物の外には、死角無く監視用の魔法道具が設置されているとかで。外からの侵入者をいち早く発見するのはもちろん、魔が差した団員の侵入も発見出来るとのことだ。

しかもその上で、侵入者を発見したらすぐに団長に連絡が入る仕組みになっているらしい。

モテたためしのない私相手にやり過ぎな気もするが、まあ私だからではなく女性寮だからということだろう。

今後私以外の女性が入団しても、団長ならきつと同じ方法で守ろうとするはずだ。

そう言えば男女で扱いに差があると嫌がる女性も居ると聞くが、私に関してはそんなことはない。

だって、実際に男女で差があると思うから。

何も、鍛練の内容を性別で変えろと言うわけじゃない。

ただ、男と女であることに変わりはないのだ。

男色で無い限り、男だらけの中に女性が一人いれば、ムラリと来てしまう瞬間がある。それはきつと、仕方のないことなのだろう。

それはそうとして、対策はきちんとする。そうすれば、間違いが起こりにくい。

きつと団長はそう考えて、気を配ってくださっているのだ。

（本当に、あの方は素晴らしい……！）

そらあもう、惚れるなと言う方が無理なのである。

確かに最近では距離が近いのだが、それでも紳士だし。

昨日はちよつとびっくりしたが、もしお付き合い出来るとしたらそれはそれはもう、めちゃくちゃ嬉しい。

（——まあ、恋愛経験がほとんどないから気後れはするけど……）

あちらは大層おモテになる美形自警団団長様。

しかも彼の団長就任を指名したのは、七十歳まで三十年間団長を勤められた鬼上官として有名だった前任者だ。

今から五年前、二十六歳の若さで後任を指名された実力者である。外見は背が高く顔が良い。それに体格もすごく良い。

腕は太く、肩幅は広く。胸板は厚くて、手も足も大きい。食事の

際には、大きな口で大きな一口をパクリといくところもグッドだ。

それでいて、内面は優しくて紳士的。

部下を叱る時も怒鳴ることは無く、静かに叱責をする。

危機が迫った時には声を荒らげることもあるが、普段の冷静さがあるからこそ、かえってそれがいいのだ。

何度女性から黄色い声を上げられているところを目撃したことか。噂では名家の出、だとかで家柄も良いらしい。

それなのに女遊びはしない。

彼は、「俺は一途なんだ」と公言して遊びの関係を求めてしなだれかかってくる女性を躲している。

（パーフェクト……!）

団の敷地を歩きながら、私はパチパチと拍手した。

素晴らしい。素晴らしい。まさに神が創りたもうた傑作。

私は今日もアレスター団長のことを褒め称え、彼がくれた良い香りに包まれながら、詰所内にある食堂への道を歩いた。

広い食堂内には長い木製テーブルが四つと、テーブルを挟むように乱雑に設置された丸い木椅子がある。

そして入って右手側には料理の受け渡し口。

そんな機能性重視である見慣れた食堂に私が足を踏み入れた時、もう既に室内は団員でごった返していた。

このブレイブリー自警団は実力主義だ。

よって実力と、きちんと治安維持に励む心意気さえあれば、比較的簡単に入団出来る。

その分訓練での扱きは厳しいのだが、他の自警団より圧倒的に団員が多く、それでいて大体の者が豪快で粗野だ。

気の良いヤツばかりで私は好きなのだが、普通の女性からしたら声が大きくて怖いことだろう。

「おう、アデリー！おはようさん！」

「おっ、っはよー！リック」

バツンツ！と背中を叩かれて呼吸を詰まらせながら挨拶を返せば、大きな体が横を通りすぎた。

前を向いたままの巨体から、ガハハと笑う声が聞こえてくる。

彼はのんびりと歩く私を通り越して、食事の受け取り口の列に並んだ。ぼやぼやしていたから、先を越されたようだ。

まあ、この程度のことは気にしない。

大雑把な男達に囲まれて過ごしていたら、こんな些細なことで目くじらなど立てられないのだ。

「……大丈夫か？」

叩かれた場所にそっと触れられ、後ろから誰かが私の体に寄り添った。上から顔を覗き込まれて、顔に影が落ちる。

あまりの背の高さに驚いていると、左肩にサラリと長い銀髪がかかった。

一つに括られた艶のある銀糸。低くて艶のある声。

私は左側から現れた男性の正体に、すぐに気が付いた。

「……あつ、団長！おはようございます！」

「ああ、おはよう。……まったく、アイツは」

にっこりと笑って顔を見上げれば、あちらも朗らかに笑い返してくれた。しかしすぐに彼の視線は鋭くなり、離れた場所にいるリツクの背中を睨んだ。

気遣わしげに背中を撫でてくれていた大きな手が、するりと右肩に回る。

「……っ」

右肩を優しく撫でられて、じわりと頬に熱が集まる。

それを誤魔化すようにヘラリと笑えば、団長が私の横に並んだ。背中を押されて歩き出し、私は彼と共にリックの後ろに並ぶ。

「おっ、団長おはようございます！」

上官の存在に素早く気付いたリックが、パツと笑顔になって朝の挨拶を口にする。声の大きさに鼓膜がビリビリしたが、まあこれもいつものことである。

「ああ、おはよう。……お前なあ、もう少し遠慮や配慮を覚えろ」

「おん……？」

溜め息を吐いて苦言を呈した団長に、リックが茶色い瞳をキョトンと丸めて、首を傾げる。

はて？と言う顔をして考え出し、考えたものの分からなかったの

だろう。やがて彼は大きな手を使って、首の後ろを搔きだした。

「ああと、すんません……？」

「はあ……」

——よく見たら顎に、髭の剃り残しがある。

リックらしいと言えばそうなのだが……「三十日前になっても女の一人も出来やしないなんて！」と自棄酒かまして泣くくらいなら、そこら辺をきちんとすればいいのと思う。

「……あつ、団長先につ」

私はハツとして一步横に移動し、手で前を指し示す。

そしてどうぞどうぞと上官を先に行かせようとするのだが、彼は目を伏せて、ふるふると首を横に振った。

「いや、いい。お前が先に貰え」

「で、でも……」

食い下がろうとすると、尚も「いいから」とかぶりを振られてしまふ。更にはトレーの山に手を伸ばした団長から、さっさと行けばかりに一枚のトレーを手渡されてしまった。

咄嗟に受け取ってしまった自分が恨めしい。

「先に席を取っておいてくれ」

「え、……あ、は、はい……」

やっぱり今日も一緒に食べることが確定しているんだ、と心の中で溢して。私は前に進んだリックとの間に出来た隙間を、すごすごと埋めていく。

私の後ろに並ぶ団長は、トレーを手にして何故だか、嬉しそうに笑っていた。

「おっ、今日のデザートはプリンか！おばちゃんサンキューな！」

「あいよ！たーんとお食べ！」

喉に詰まらせるんじゃないよっ！と言う我がアイドル、そして我がオカンの食堂のおばちゃん。勤続三十年の大ベテランだ。

リックが手にしたトレイには、でーんと山盛りになった肉料理の皿と、ドドドーンと皿に乗ったパンの山、そして山盛りのサラダがある。デザートプリンもなかなかの大きさだ。

それを横から見て、今日も凄いなーと思っていたら、すぐに私の番が来た。

「おばちゃんおはよう」

「おはよう、アデリーちゃん！ほいよっ！たーんとお食べー！」

ありがとうと答えて、他団員よりは手加減してくれているものの、大変ボリューミーな皿を受け取る。もちろんプルプルのプリン付き。

（美味しそう……！）

ご馳走を前にしたら、団長への遠慮なんて飛んでいってしまった。

もう、につこにこである。早く食べたくて仕方がない。

団員食堂の料理は給料天引きだが格安で、ボリューミーで、大変美味。このあとに地獄の朝訓練が待っているため、皆腹一杯食べてそれに臨むのだ。

また、早めに食べて、腹をこなれさせておくのも大事なことなのである。そうじゃないとせっかく食べたのに、戻してしまうから。

「ふんふんふーんっ」

今日も美味しそうなご飯♪デザート♪お腹空いたな♪

と私は上機嫌で栄養満点な料理が乗ったトレイを抱え、賑やかな食堂の中を歩いていく。

窓の外はまだ薄暗い。よってのんびりと食事をして、訓練に間に合うだろう。

（あ、そう言えば席を取っておいてくれと、頼まれていたんだった）

美味しそうな食事を前にして、課せられた任務を忘れるところだった。危ない危ないと心の中で呟いて、私は二人で座れそうな席を探す。

「あっ、いいところ発見！」

丁度よく人が少ない場所を見つけた。良かったと胸を撫で下ろして、私はにこにこしながらそこに向かって歩いていく。

夢中で食事を掻き込んでいるリツクの席をたまたま通りすぎ、お腹がぐうと鳴った。

厳めしい顔を幸せそうに綻ばせて食事する男性というものは、何だか可愛らしいものだ。

無事に辿り着けてテーブルにトレイを置くと、私は椅子に腰を下ろした。ほこほこと湯気を上げる料理を見下ろして、涎が出てくる。いい香り。早く食べたいけど、団長を待たなきゃ。

「待たせたな」

「あ、いえ……っ！」

有り難いことに、この食堂はとっても提供が早い。

おかげで殆ど待つことなく、団長が合流した。

向かいの席に置かれた団長のトレーには、リックが受け取ったものと同じ量の食事。

大体の団員がこの量を食べるのだが、あっという間に胃袋に消えていく。その光景は何度目にしても爽快だ。

——余談だが、私が入団した当初のおばちゃんは手加減を知らなくて。交渉して最適な量に調整してもらうまでは、食べ切るのに本当に苦勞した。

しかしお残しは申し訳なさすぎたので、食べ盛りで食べかけでも気にしない団員に手伝って貰ったという過去がある。

「いただきます！」

「いただきます」

フオークを使って、肉炒めをパクリ。

うまい。美味すぎる。ありがとう食堂で働く皆。

感謝しながら、サラダもパンも次から次へと口に放り込んで。私は無我夢中で、美味しい食事を頬張った。

「……………」

「……？」

そうして食事を進めているとふと、視線を感じた。

顔を上げれば、金色の瞳と目が合う。どうやら団長は私の食事風景をじっと見つめていたようだ。

私が首を傾げると、彼は私と目を合わせたまま、大きな口で沢山の食事を頬張る。

「お、美味しいですね、団長！」

何故だかドキリとしてしまつて。慌てて声をかけたが、その声は妙に上擦つていた。

「……ああ」

咀嚼し終わつてゆるりと口角を上げた団長は——壮絶な色気を身に纏つていた。きちんと嚥下してから口を開いたのに、ペロリと赤い舌で唇を舐める。

上品な食事の所作と、絡み付く熱視線。

ちぐはぐで、アンバランスで——

「あ、あははっ」

「……………」

何だか妙に緊張してしまつた私は、誤魔化すように笑つて。それから食事中なのにも関わらず、ゴクリと生唾を飲み込んだのだった。

3. 未知との遭遇

一瞬だけ妙な空気に圧倒されたものの、その後は何事も無く食事を進めた。

しかも美味しい美味しいとデザートプリンを食べていると、にこやかな団長が自分のプリンを半分別けてくれたりもした。

そうして幸福な朝食の時間を終えた私は、小休憩を終えた後訓練場に向かい――

今では地獄の朝訓練を終えて、土の上に転がっていた。

見上げるのは、青い空。

半屋外である広い訓練場は、魔術の訓練場も出来るようにと、端を除いて天井が無い。

そして床は、木製ではなく土だ。

「ああ……っ、ふうっ、お、は……っ」

死にそう。準備運動から始まり、次第に苛烈になっていく訓練内容。魔術師でも、魔力切れを起こした際や接近された際には体術が必要になる。

生き延びるための術になるだ。

だから私も、他の団員と同じようにスパルタ訓練を毎日受けている。でも死にそう。もうイチミリも動けない。何もしたくない。

「汗を流したい者は早くしないとこのまま任務に組むぞ！ さあ動いた動いた！」

パンパンと手を叩いて急かす音と、団長のよく通る声。

地面に散らばった骸^{むくろ}が複数体、ビクリと震えた。

「ひぎい……っ、しゃ、しゃわあ……」

その内の一つはもちろん、この私だ。

団長は自主性に任せるようなことを言っているが、汗を流さず巡回になど出掛けたら、叱られるのは目に見えている。

いいやそれ以前に、このままだなんて気持ちが悪すぎる。

私はガクガクする腕でどうにか体を持ち上げ、生まれたての小鹿のように膝をガクガクさせながら歩き出した。

横を見れば、同じように震えながら立ち上がる巨漢がいる。

「ふぐう……っ！ふうつ、うぐうつ」

巷では色男として有名な、エバーストだ。

金色の髪を汗と土埃でぐしゃぐしゃにして、褐色の肌に掠り傷をつくっている。白い歯を食い縛って立っているが、彼は彼で本当に辛そうだ。

日々大人の恋を謳歌しているエバーストも、こうなってしまう。訓練とは本当に恐ろしいものだ。そう思いながら、私は震える

足でシャワールームに向けて歩いて行った。

背後では、ズシヤリと誰かが頰れる音がした。

男性用と女性用で真逆の位置にシャワールームがある。なので、振り向かない限りは誰が脱落したのかは分からない。

（ああ、エバースト……。彼が力尽きてなければいいけど……。）

だからと言って別の人であればいいと、そう願ったわけではないのだけど。ヨタヨタと歩き続ける私はただ、仲間を案じ続ける。

（そう言えば入団当初……。エバーストにも、食事の山の片付けを手伝ってもらったっけ）

仕方ないなあという顔をして、私が食べきれなかった食事をモリモリと食べてくれた一つ年上で五つ先輩のエバースト。

そんな懐かしい思い出に浸って苦しさを紛れさせながら、私はシャワールームに向かった。

地獄のような鍛練も、日々積み重ねれば実りを得るものである。

（気分、爽快っ！）

シャワーを浴びてサッパリした私は、腰に手を当てて仁王立ちをし、澆刺とした笑顔を晴天に向けていた。

私の後に戻ってきたエバーストも、ビシッと決めて隣に並び、晴れやかな顔で訓練場から見える空を眺めている。

私からも彼からも漂う良い香り。最高に気分が良い。

——やがて団長から我ら団員に、本日の予定が説明される。

私は姿勢を正し、表情を引き締めて。真剣に彼の言葉を聞いた。

「それでは各自、持ち場につけ。解散！」

『はっ！』

本日の業務の指示が終わり、私達は一斉に敬礼をした。

各々が移動し始める中で、私はじっと待機する。

これから住宅街の巡回をするのだが、ペアとして一緒に回るのが、団長のようなのだ。

現在彼は、副団長のイジュールさんに指示をしている。

今団長の正面に立っている銀髪で眼鏡をかけている細身の――他団員と比べると細身である男性が、副団長だ。

巷では堅物、鉄仮面なんて言われることもあるみたいが、とっても聡明なお方なのである。

団長とは違ったベクトルで、非常に頼りになる。

何だかんだで団員が泣き付くことが多いのは、こちらの副団長だ。何ていったって、肉体派な男ばかりなので。肉体で解決できないことを、皆相談するのだ。

そして相談すると大体叱られる。でも叱りつつも解決策を出して

くれるのだから、副団長もかなり人が良いものである。

（んー……だいぶ話し込んでるな）

あれこれと思考を巡らせてみたが、二人はまだ話中だ。

手持ち無沙汰な私は二人の様子を眺めながら、襟を詰まんでスツと匂いを嗅いだ。

持ってきていた香水を使って、また香りをつけたのだ。

彼がくれて、よく似合っていると言ってくれた香りを纏って隣を歩く。例えそれが仕事でも、とても大切なことのように思えた。

——もちろん仕事中に浮わついていたら、注意をされるから。しっかりと仕事に集中すると、心に誓っている。

ただ仕事が終わってから振り返り、ほんのりと気分を持ち上げることは悪いことではないはず。

その瞬間を楽しむために、私は今日もこの香りを身に付けて仕事

に励むのだ。

（最近ではわりと……いつものことでは、あるんだけどね）

いつからか団長とペアで巡回に出ることが増えた。だから珍しいことではなくなったのだが、それでも『特別』は褪せない。

ただもう少しだけ——変化がほしい。

一歩、踏み出すような。

もう少し深いところに踏み込むような。

そんな、変化が——

「悪い、待たせたな」

「……いえ、まったく」

副団長との話を終えてこちらに歩み寄ってきた団長が、そっと私の背中に右手を当てた。

突然の接触到ドキリと鼓動が跳ねたが、笑って平静を装う。

私の左に立った団長が静かに歩き出し、優しく背中を押されて私の足も自然と前に出る。

そうして促されるまま歩き出し、私は彼と共に訓練場から出た。するりと背中を撫でて離れていった手。

仕事中なので『一般的な』距離を取って、隣を歩く。

広い詰め所の中でブーツを慣らしながら並んで進み、玄関口へ。

触れられていた場所がジリジリするような錯覚を振り払い——私は巡回任務に集中するため、無理矢理思考を切り替えた。

* * *

時刻は十時過ぎ。平日の午前中である住宅街は、とっても静かだ。民家の敷地を主張する白く塗られた木製の柵。その間にある道を

団長と並んで歩いていると、どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

何の気なしに声がした方向に顔を向けると、庭で洗濯物を干しているご婦人の姿が目に入る。

その背中には、おんぶ紐で固定された赤子。

本日二度目の洗濯なのか、庭には沢山の衣服が干してある。

きつと子沢山なのだろう。

様々なサイズの子供服が干されている様は、微笑ましい。

だが、とっても大変そうだ。それにきつと家の中には、もう少し大きな子供もいるはず。恐らく旦那さんは仕事で不在だろう。

私はご婦人やお子さんを案じて、そつと息を吐いた。

チラリと団長に視線を向けると、構わないと彼は頷く。

「奥さん、何か手伝いましょうか？」

「ん……？」

家の敷地の外、柵越しに声をかければ、ご婦人はキョトンとした顔をこちらに向けた。

それからパツと笑顔になると手にしていた洗濯物を籠に戻し、こちらに近付いてくる。

「あらあら、ありがとうねえ！でも、いいのよお！」

うふふと笑って手で叩く仕草をしたご婦人は、背中の子供をあやしなながらも親しげな笑みをこちらに向けている。

でも、と私が声を漏らすと、彼女はいいのいいの続けた。

「ブレイブリー自警団の皆さんには、ほんつとよくしてもらってるからね！お陰で住みやすいったらなんの。家事くらい、なーんてこないわ！」

「……ふふ、それはよかったです」

澆刺と笑うご婦人は、どうやら助けを求めている様子だ。

お節介の押し売りは良くないと判断し、私は引くことに決めた。

「何か困ったことがあったら、いつでも言ってくださいね」

「ええ、巡回頑張ってね！」

最後まで笑顔で応対して下さったご婦人にお辞儀をして。私は少し離れた団長の背中を、小走りで追いかけた。

——住民からの要望や相談を受けることも、自警団の仕事だ。

貧富の差を無くすことは難しいが、余分な稼ぎ貧しい者に支援をすることは出来る。その為に、うちの自警団には魔物討伐もあるのだ。

また、貧しくとも腕っ節に自信があれば、自警団で働いて十分な稼ぎを得られる。

何故なら我らがブレイブリー自警団は、やる気と根性と清き心さえあれば、比較的誰でも入団できるのだから。

「確か、鍛冶屋ジェフの店主の奥方か」

追いついて左隣に並んだ私をチラリと見て。団長は先程のご婦人の話をする。

「ええ、そうです。ジェフさん、無口だけど愛妻家って有名ですよ
ね」

髭面で熊男な巨漢ジェフ。

自警団が戦闘用品を購入する商会に、武器や防具を納品している鍛冶屋だ。

当然、うちと付き合いがある。奥方に関しては直接的な関わりはないが、巡回していると見かけることが度々あった。

地域密着型とでもいうのか。私達南地区担当の自警団は、庶民派で武闘派で喧しくて粗野だが、担当地区の住民から愛されている。

これはこの自警団が設立された八十年前から、変わらないらしい。

その評判が現代まで変わっていないのは、偏に歴代の団長が前任者の意思を引き継いできたからだろう。

こちらのアレスター団長だって、前任の鬼団長とタイプは違えど、団内の規律に厳しく、団員を正しく導いているのだ。

そんな素晴らしき方の下で働ける光栄といたら、背筋が伸びる思いである。

「ん……？」

私が改めて、巡回頑張るぞ〜と気合いを入れ直していると、視界の端に見慣れぬものが映った。

立ち止まってそちらを注視すると、左に分岐している道の端にある茂みから、白いモコモコがはみ出していると気付く。

もぞもぞと動いている。どうやら生き物ではあるらしい。

「まさか……魔物？」

「んっ？どうした？」

私が立ち止まった場所から三步前に進んだところで、団長も足を止めた。

振り返った彼に「あれ」とモコモコを指を差せば、団長は首を傾げる。

離れているから正確には分からないが、恐らくは小型犬サイズの白いふわふわ。

見えているのはお尻なのか、目を凝らしてみると小さい尻尾のようなのが、時折ピルピルと動いていた。

全体的なフォルムとしては——羊だろうか。
羊にしては、圧倒的に小さすぎるが。

「……………」

目配せをして、頷き合って。息を詰めると、私達は足音を立てな

いようにと慎重に近付いて行く。

しかし二人で背後に迫っても、獣に気付いた様子はなかった。

（警戒心が……薄いのかな？）

ガサゴソ。そこに何か食べ物でもあるのか、獣は茂みの中に頭を突っ込んだままだ。

しかし今は平気でも、こちらに気付くなり襲いかかってくる可能性はある。

私は体内で秘かに魔力を練り、団長は団長で腰に帯刀した剣の柄を握っていた。

「……きゅっ？」

もう一步接近した瞬間、モコモコがビクリと体を跳ねさせた。

私達が緊張に包まれている最中で、獣はコテンと首を傾げるような動作をする。

それからやつと他の生物の気配を察知したのか、獣は踏ん張るような仕草をして、茂みから頭を引き抜こうと奮闘し始めた。

「きゅーうっ！きゅーっ」

（随分と可愛い鳴き声だな……）

何とも愛らしい仕草や鳴き声に、段々と緊張感が薄れていく。しかしどう考えても、羊の鳴き声ではない。

それでもちろん、犬でも猫でもない。聞き慣れない鳴き声だった。

「きゅっ、きゅっ！」

「あらら……」

勢いが付きすぎたのか、茂みから頭が抜けた獣はドスンッ！と盛大に尻餅をついた。更にはぼてんと横に倒れて、そのままコロコロと転がり、引っくり返って動きを止める。

「だ、大丈夫……？」

「きゅーっ」

桃色の目が、くるくると回っている。

追いかけて腰を屈め、観察して。私と団長は顔を見合わせた。

「見慣れない生き物ですね……」

「ああ、俺も初めて見る。魔物……か？」

少ししてパチパチと瞬いた、獣の瞳。

こちらを見るなりキラキラと輝き出し、素早く起き上がって四足歩行に戻った。

「きゅーっ！きゅきゅーっ♡」

「な、なんだ……？害意は……ないのか？」

屈伸運動のような動きをしたり、軽く跳ねたり。

桃色の瞳を持った獣は、笑うように目を細めて私達のことを交互に見上げていた。

その姿は羊に似ていて、桃色の角も羊のものに酷似していた。蹄まである。それもしつかり桃色だが。

一見するとやたら桃色な羊だが、その体は私が両手で抱っこ出来るくらいに小さい。

子羊にしては、やっぱりちよつと違うように見えるし。こんな動物、見たことが無い。

害意が無くて大人しい、魔物だろうか。

「きゅっ♡きゅっ♡」

「なんか……友好的、みたいです」

「そうだな……。人に飼われていた魔物か？」

様々な種族が存在する魔物には、友好的で争いを好まない種族も存在する。

小さくて見た目が可愛く、それでいて温厚な個体は人間に愛でら

れ、飼われていることも多い。

その内の、珍しい個体だろうかと判断して、団長は推定魔物の前にしゃがみ込んだ。

私もその横にしゃがみ込み、白いモコモコをじつと観察する。

すると魔物は小さな尻尾をプルプルと震わせ、また笑うように目を細めた。

「きゅーっ」

「うーん可愛い。やっぱり、愛玩魔物でしようか……」

「そうだなあ。人にとっても慣れた様子だし……きつとそうなんだろう」

噛むかな……？と心配しながらも手を近付ければ、ニコニコした魔物が頭を擦り寄せてくる。

その上でこちらに駆け寄ってきて、私の足にスリスリと体を擦り

付けてきた。

「う、うーん。本当に敵意は無さそうですね……」

「ああ……」

試しに抱き上げてみると、暴れることなく素直に持ち上げられた。腕の中に抱え込むと、モコモコは大人しくされるがままになっていく。頭を撫でると、「きゅっ♡」と嬉しそうに鳴いた。

——こうなると、違うことが心配になってくる。

果たしてこの子は野生で生きていけるのか。

いいやそもそも、やっぱり飼われていて脱走していたのではないか。首輪は見当たらないが——今頃、飼い主が泣きながら探しているのではないか。そう懸念して、眉根が寄る。

「食べていたのは……木の実か。やはりどこから脱走して、腹を空かしていたのだろうな」

「可哀想に……」

やっぱり、飼われていた線が濃厚だ。

警戒心が無さそうに見えるし、野生でなんて生きていけないだろう。茂みの中を探っていた団長は食べていたものが有毒果実ではないと判断して、茂みをササツと整えた。

「きゅ、きゅーっ♡きゅーっ♡」

「……一度連れ帰るか。脱走したペットを探している住民を探そう」
「そう、ですね……」

私を見て、団長を見て。ニコニコしながらきゅうきゅう鳴く獣を抱っこしたまま、私達は帰路に着いたのだった。

詰め所に戻った私達は、まず待機組であった団員二人に巡回の代打を頼んだ。そしてその後、獣を抱えて団長室へ移動した。

団長室とは、団長が主に書類仕事をするための執務室だ。応接室も兼ねている。

広い室内。入って右手側の部屋の隅には、長椅子二脚とテーブルの応接セットがある。

部屋の壁の殆どが書類棚や本棚で囲われ、窓は少ない。

入って左奥に見える壁には、仮眠室に繋がるドアがある構造だ。

中央より奥には立派な執務机があつて。それとセットの、立派な革張りの椅子もある。

その椅子に今、団長が腰掛けている。

例え見慣れた光景であつても本当に素敵だ。いつそ画家を呼んで絵にしてもらいたいくらい。

そうなると椅子を持ってきた私が横からお邪魔しているのが、邪魔だけど。まあ、近くで見れるのは役得だ。

そんなこんなで。私は机の短辺、それも彼から見て右側の面をお借りして書類の確認をしていた。

私の左斜め前に座る団長も、私と同様に書類の確認をしている。

——余談だがここに辿り着くまでは、なかなか大変だった。

この自警団は男だらけのむさ苦しい環境だ。

訓練は厳しく、詰め所内や寮の内装は飾り気のないもの。

ところどころに花を飾ってほしいなんて、誰も思っちゃいないけれど。それでも身近に癒しがあればと、そう願う団員も多いことだろう。

犬を飼いたい。猫を飼いたい。保護した愛玩魔物の面倒を寮で見てもいいですか——？

全て団長が却下と答えた願い出だが、諦めきれない団員も多いと聞く。

——そんな折に、団長が連れて帰ってきたモコモコの小さな獣。それは大人しくて、大変可愛らしい。

目にした団員が、漏れ無く全員食い付いた。

無骨な男達が皆、目をキラキラさせて大きな手で慎重に、獣を撫でようとするのだ。

私も団長も、どうしても無下にする事が出来なかった。

そうして説明と多少の触れ合いを経て少しずつ団長室への道を進み、果てしなく長く感じるほどの時間をかけて、漸く辿り着いたのである。

——しかし。

「きゅーちゃん♡きゅーちゃんは何が好きなのかなあ??？」

「きゅーっ、きゅっ、きゅーっ♡」

私達が来る前からここで書類の整理をしていた眼鏡クール系副団

長が、見事に陥落した。

普段は殆ど笑うことなどないのに、今は見事にニヤけ切っている。

「……やはり、団でペットを飼う検討するべきか？ いや、だが……命だしな……」

来客用の長椅子の上で大人しくしている推定魔物の前で地べたに座り、どこから持ってきたのか猫用の玩具を手にあやしている副団長。その姿を見つめて、団長が考え込んでいる。

そして彼は「捨て猫……」などと呟きながら、手元の書類に視線を戻した。

「……、……はあ」

私は私で、デレデレな副団長をじとりと見つめて溜め息を吐く。

団長と二人で手分けしてペット搜索の資料を確認しているところなのだが、目ぼしい情報は見つからない。

私は幸せそうな副団長の声を意識の外に追いやって、再び書類の確認に戻った。

（犬……、猫……。これは、一角兎の搜索願い）

担当区域を一日に何度も巡回する自警団には、こうして市民からペットの搜索願いが届く。

いなくなったペットの情報を頭に入れて巡回すれば、見つけられることも多いからだ。

「……駄目だな。小型愛玩魔物を探している住民はいるにはいるが、小さい羊型の魔物を探している人はいない」

「……、……こっちも駄目です。今ので最後の一枚でしたが、該当する申請はありませんでした」

例え愛玩用と言っても、魔物は魔物。

飼育するには申請が必要で、もし脱走したなら自警団への報告が

義務づけられている。

だから飼われていた魔物が脱走した場合は、まずその市民が暮らしている地区の自警団に報告して。書類が作成され、他の自警団に資料が回される。

よってここに該当する資料が無いということは、この愛玩魔物だろう魔物が逃げたという報告は無いわけで――

脱走したてほやほやで、もう少し時間が経てばどこからか報告が入る可能性もあるが、正直頭が痛い。

一体あの子は、どこから来たんだ。

「おい、イジュール。いつまでそうしている。関係各所、そして街への聞き込みをしてきてくれ」

「……ハッ!? はっ、はい!」

鶴の一声で我に返った副団長が、慌てて立ち上がった。

副団長でもあろう方に雑用をさせてしまうのは何だか忍びない。

けれど役職のある方なら、例えば北地区にある聖職者が集まる神殿に聞き込みに行っても、門前払いにはならないだろう。

「行って参ります！」

名残惜しそうに一瞬きゅーちゃんを見つめたものの、副団長は団長を正面から見てビシリと敬礼をした。

「……ああ」

「きゅーっ」

きゅーちゃんも、副団長を真似るような動作をした。

（……え？ 敬礼を真似したの？）

もしかすると——めちゃくちゃ知能が高いのかもしれない。

チラリと団長の様子を盗み見ると、彼は真剣な表情できゅーちゃんのことを見つめていた。

踵を返した副団長が静かに退室し、部屋に二人と一匹きりになった。

私はピヨンと椅子から降りてトコトコとこちらに歩いてくるきゅーちゃんを見守りながら、斜め左前に座る団長にそつと声をかける。

「友好的で、話しかければ返事をするように鳴く。一体、きゅーちゃんは何なのでしょ……？」

「わからない。イジュールが情報を得て帰ってくることを祈ろう」
ふるふると首を横に振った団長に、私は頷いた。

左右に揺れる銀色の束に、つい目を奪われてしまう。

けれど真面目な話をしてるからと気を引き締めようとした、ところ。団長が意地悪く笑った。

「……それにしても、きゅーちゃんで決定なのか」

小さく笑って呟いた団長が、チラリと私の目を見た。

視線が合ったその金色の瞳には、表情と同じく意地悪な色が宿っている。

「あっ、だっ、だって副団長がそう呼んでいたから……」

「ほう？」

「……っ」

元々近い場所に座っていたから。彼がこちらに伸ばした右手は、すぐに私の左手を捉えた。

甲に熱を感じる手をキュツと握り込めば、今度は窺うような視線を向けられる。

「……なあ、前々から……その、思っていたんだが」

「は、はい……？」

一転して、不安げに揺れ始めた金色の瞳。

ゴクリと生唾を飲み込む音がして——僅かに瞳の光を強くした団

長が、下から私の目を覗き込む。

束ねらた彼の長い銀髪が、首を傾げるのと同時にサラリと横へ流れた。

「俺の、勘違いでなければ、なんだが……お前は結構、その……」
「は、はい……」

硬い皮膚でするりと手の甲を撫でられて、ゾクリとした感覚が腰に流れた。

相槌を打ちながらも、脳裏に思い返されるのは昨夜の記憶。

酒場で隣の席に座り、ぴったりと横に張り付いてきた彼は私の腰を抱き、それから私の太ももを――

「俺のことを……わ、悪くは思っ……ないんじゃないのか？」

「え……っ？」

かなり遠回しに問いかけられた言葉に、頭の中が真っ白になった。

（――まさか、バレてる？）

初めて彼の姿を見た時から、ほんのりと心の中で色付いている恋心に。両想いかもしれないと思いながらも、怖くて必死に隠してきた想いに。

まさか気付いているとでも、言うのだろうか。

「なあ、アデリー。お前……も、俺のことがす――」

「きゅー？」

「……えっ？」

きつと、私達は大事な話をしていた。

それなのにふと気が付けば、テーブルの上にきゅーちゃんが乗っていた。

呆気にとられていると桃色の瞳が私を見て、それから団長を見て。何故だか嬉しそうににっこりと笑う。

それからまるで、「そうかそうか」と言うように未知の獣はウンウンと頷いた。

「な、何だ……?」

突然のことに、団長ですら動揺している。

獣にしてはやっぱり、やたらと知能が高い。

まさか、本当はとんでもなく危険な魔物なのでは――

そう私達の間に緊張が走ると共に、彼の獣はキラリと桃色の瞳を光らせた。――そして、ぶるぶると全身を震わす。

「きゅくくくっ♡♡♡」

「えっ!? な、何……!?」

「まずい、息を止めろっ!」

きゅーちゃんが水気を飛ばす犬のように体を震わせると、白い毛皮の中から桃色の粒子が溢れ出した。

咄嗟に身を引いた私は、同じく立ち上がった団長に引き寄せられる。そして強く抱き締められて、胸板に顔を押し付けられた。

桃色の粒子は煙となり、やがてもくもくと空気中に広がって、室内を満たしていく。

「きゅ、きゅーっ♡♡」

「……っ、……っ」

体を密着させたまま更にきゅーちゃんから距離を取った私達は。

今では口許に布を当てて、粒子を吸わないようにと気を付けている、が――

既に室内は、薄桃色の煙で覆われていた。

その上吸わないようにと気を付けていても、粘膜から吸収してしまうのか――段々と、体が熱くなっていく。

そして。

「――あ……」

「――はっ……」

どうする、と団長と目を合わせた瞬間、失敗に気付いた。

心の底にひっそりと仕舞っていた恋心が、収納していた箱からドーン！と飛び出し、出てきてしまう。

私は袖で口を押さえていたのも忘れて、すぐ側にいる彼に両手を伸ばした。

「アデリー……」

彼の両腕も、これまでよりしっかりと私の体を抱き締めた。

金色の瞳は潤み、一心に私のことを見つめている。

「ああ、アレスターさん……」

「アデリー……っ」

ひしっと抱き合い、互いの体をぎゅうぎゅうと抱き締める。

頭がぼんやりとしているのに、心臓は壊れそうなほど暴れていた。

「俺の贈った、香水のにおいがする……」

「ん……っ」

首筋に彼の口が触れて、ちゅうっと肌が吸われた。ゾクリとした快感が走った腰は、大きな手で優しく撫でられている。

「きゅーっ♡」

視界の端に、満足げに鳴いて猫のように伸びをするきゅーちゃん
が映った。

きゅーちゃんはそのまま長椅子の上に移動して、一仕事終えたと言わんばかりの様子で眠る姿勢に入る。

（でも、そんなことはどうでもいい……！）

背中や腰を撫で回され、首筋に口付けられる。

耳朵を食んで名前を呼ばれれば、お腹の奥がキュンとした。

たまらず顔を上げれば、唇に食らい付かれる。

「んっ、ふ……っ♡んんっ♡は……っ♡」

角度を変えて、何度も唇を重ねる。

薄い唇が私の唇を撫でて、それでいて熱い舌が表面をチロリと擦った。

「ああ、アレスター、さん……」

「ん、はあ……っ。いいから、もっと」

うっとりとな前を呼んで、またキスに耽る。

初めての口付け。それなのに、自然と口が動く。

あまりの心地よさと甘さに、私は酔いしれた。

「あっ、んむっ♡ふ、んんっ♡」

「はあ、ああ……っ♡ちゅっ♡」

大きな手に顔を挟まれ、頬どころか耳まで、ガツチリとホールド

される。

舌と舌を絡ませ、ぬちゅぬちゅと擦り合わせる。気が付けば壁際に押しやられていた私は、足の間に膝を差し込まれた。

「好きだ、お前のことが好きだ。ずっと、好きだった」

「あっ！わ、私、も……っ、ずっと好きで……！」

腰に腕が絡み付き、またぎゅうつと抱き締められる。

盛り上がった胸板で柔く頬が潰れ、ドクドクと鼓動を刻む心音が

耳を打つ。

「さっ、三年前、街でたまたま見かけてっ。それで、一目惚れ……」

「ああっそうだったのか！それなら俺と同じだ。運命だ……！」

気持ちの吐露が止まず曝け出していると、凄い力で体を持ち上げられる。

「きゃああっ！」

「ああ、ああアデリー！愛してる……！」

縦に軽々と抱き上げられた私は、彼の頭を抱き込んで目を白黒させた。お腹にグリグリと額を擦り付けられながら、更に目を回す。

「ああ好きだ。本当に好きなんだ！まさか両想いだったなんて！」
「わ、っ、きゃ……っ」

高い。天井で頭を打ちそうだ。

支えを求めて銀のポニーテールを掴めば、「もっと握ってくれ！」と謎の要求がされた。

お尻を支える大きな手は、さわさわと服越しに肌を撫でている。

「嬉しい、嬉しい嬉しい！触っても拒絶をされないとは思っていたが、まさか、まさか、本当に……！」

「あっ、あ、ふう……」

グリグリ、グリグリ。甘える獣のようにお腹に頭を擦り付けられ

て、私は微妙に苦しいような気持ちいいような、変な感覚を覚えた。
団服の厚い生地越しではあまりよく分からないが、彼の熱い吐息のせいでお互いの体の間に、熱気が籠っているような気がする。

「……ああ、すまない……。お、下ろして、やろうな……」

「は、はい……。んっ♡ふ、う……。♡」

ゆっくりと体を下ろされて、今度は優しく抱擁された。

大きな体にすっぽりと包み込まれたまま、頭にスリスリと頬擦りをされる。更には右手では肩から背中のラインを、左手では腰からお尻までのラインを繰り返し撫でられていた。

「ああ、ああ、可愛い……。どうか俺と、たっぷり、仲を深めてくれ……。♡」

「あっ、んっ♡ふっ、あ……。っ♡」

今度は背中からお尻までを往復するように撫でられながら、お腹

と鼠径部も撫でられる。

喘ぐ口に甘く吸い付かれ、口の端から垂れた唾液は舐め取られた。
「本当はずっとずっと、お前と恋人になりたいと思っていた。お前の事を抱きたいと思っていた。でも拒絶されたらと恐れて、なかなか、踏み出せなかったんだ」

「あっ♡あっ♡くん、んうっ♡」

じくじく。じんじん。お腹の奥が疼いて仕方ない。

早く早くと気が急いて。今すぐに奥まで、貫いて欲しかった。

「恋に落ちたのなんて、初めてだったんだ。それなりに遊んでいたのに……本命にはここまで臆病になるのかと、自分自身に驚きだった」

「あ、あ、団長……アレスター、さん……♡」

今度は彼が、感情の吐露を止められなくなってしまったようだ。

そういえばさつき団長は、私と同様に、三年前に一目惚れをしたと言っていた。

けれど私が自警団に入っただのは二年前だ。そこから一年かけて話せるようになり、更に一年かけて触れられるようになったのだとしたら。確かに本人の言う通り、かなりの奥手である。

「そんな俺に出来たことと言えば、陰ながら見守ることだけ。だからずっと……ずっと。お前の事を『見守って』きた」

「お……っ♡はあっ、お、くん……っ♡♡」

グッ、と下腹部を押されて、子宮の辺りに甘い快感が走る。

ガクガクと膝が笑い、差し込まれた彼の足に半ば腰を下ろす。

「愛してる……愛してるんだ……」

「あッ！あっ、あっ！あん……っ！」

グリグリと膝頭を擦り付けられて、硬くなっていた陰核が押し潰

される。

一瞬で突き抜けていった強烈な喜悦に頭のなかが真っ白になって。カクンと体から力が抜けければ、抱き止められる。

「可愛いな……。なあアデリー、奥に行こう？」

「あっ、お、奥……？」

息を整えながら、必死に頭を働かせる。奥と言えば、仮眠室だ。

団長は団長で寮に個室があるが、忙しい時はここで寝泊まりをする。——つまりは、ベッドに行こうというお誘いだ。

「お願いだ、俺を受け入れてくれ……！」

「んっ、んっ♡は、い……♡」

ぎゅうぎゅうと抱き締められながら、乞われて。つい私は、頷いてしまった。

ハッと息を飲む音がして、優しく頭頂部に口付けが落とされる。

「ありがとう、ありがとうアデリー……♡受け入れてもらえて、俺は本当に、嬉しいよ……♡」

「ふぁ、は、い……♡」

宝物を扱うように指で髪を梳かれ、天にも昇る心地になる。ちゅ、ちゅ、とまた頭に口付けが落とされて、ぶるりと体が震えた。

「さぁ、ベッドに行こうな……♡」

「はぁっ、はぁ……っ」

横抱きで体を持ち上げられて、顔中に口付けの雨が降らされる。

そうして十二分に甘やかされながら、私は仮眠室まで運ばれて行く。

「きゅっ、きゅっ♡」

眠りかけていたけど最後に声をかけた、といった風体の獣は、まるで。私達に「ゆっくり楽しんでおいで♡」と声をかけているようだった。

大柄な団長が寝転んでも十分に寛げる寝台。

そこにドサリと下ろされた私は、座った状態で噛みつくような口付けを受けていた。

その上で素早く、衣服を剥ぎ取られていく。

「アデリー、アデリー。愛してる」

「はっ、ふ……っ♡ん、く……♡♡」

真っ先に脱がされて床に投げられた上着の上に、私が着ていたズボンも重ねられる。

ぷちぷちとボタンが外されていくシャツ。

全てボタンを外し終わると、慌ただしく肩から下ろされる。

そして肌着と一緒に、それも衣服の山の一部となった。

「はっ、はっ、くそ……っ！」

「ん……♡」

引き千切りそうな勢いでベルトを外し、大急ぎでズボンを脱ぐアレスター団長。そんな彼の肩を撫でながら、私はうっとりとしていた。

既に裸である彼の上半身は、筋肉の盛り上がりがとても素晴らしく――彫刻のように美しい。

はやくその下も見たいと蕩けた思考で考えながら、私は彼の胸板をツンツンとつつく。

そうしていると、金の瞳で恨めしそうに見つめられた。

「ただでさえ限界なんだ。あまり煽ってくれるな」

「あ……っ」

ついに下も脱ぎ去った団長が、私の体を押し倒した。

すかさずシートと背中の中に手が差し込まれ、胸当てのホックが

外される。

「あん……っ！」

投げ捨てられた胸当てを目で追っていると、ガバリと開かされた足の間——湿った下着の中心に、ゴリリと硬い物が押し付けられた。

「はっ、もう、ぐしゃぐしゃ……っ」

彼もまだ下着を身に付けているようで、視線を下ろすとその中央が盛り上がっているのが見える。

チラリと考えてみたものの、彼がどちらについて『ぐしゃぐしゃ』だと言ったのか、私には分からなかった。

「はは、はっ、すご……っ♡気を付けてないと、すぐ、出そうだっ」
「んっ、んんっ♡あ、ふっ♡」

足のあわいをゴリゴリと擦られながら、のしかかられて口付けられる。

上から胸元に垂れてくる銀髪。まだ縛られたままの長い髪を、私はぎゅっと抱き締めた。

「っ、こら……っ」

「んっ、ふっ、んうっ♡はっ♡」

ちゅぴっと音を立てて唇が離れたと思えば、また食らい付かれる。ねっとりと口内を舐め回す分厚い舌。

性急に体を撫で回す大きな手。体が、燃えるように熱い。

抱き込んだままの髪は手触りが良く、少し硬い質感だった。

「ンッ、ああん……っ！」

「は……っ♡」

彼のものの先端で、割れ目の少し上の辺りが押し潰された。

その衝撃に体を仰け反らせれば、口内から抜け出た舌が、開いたままの唇をぺろぺろと舐める。

「イイ声だ。ここ、好きか？ん？」

「あっ、アッ！んんっ♡♡んあっ♡す、きっ♡」

ビリビリとする場所を、グリグリと押し潰されている。

その感覚は強烈だ。勝手に腰が跳ねてしまう。

今や二人の下着は私から溢れ出した蜜でグシヨグシヨ。

再び唇を奪われれば、更にお腹の奥が蕩けてしまった。

「あれすたー、さんっ♡あれす、たーっ♡」

「ん……っ♡ああ。なんだ、アデリー♡」

抱き締めていた髪を離して、彼の逞しい首に腕を絡める。

そうして縋り付けば、ちゅっ♡と唇を甘く吸われて、するんと足

から下着が抜き取られた。

ゴソゴソと彼が動いて、もう一枚の布も纏めてベッドの下に放られる。

「すき……っ♡」

「っ、……っ」

蜂蜜のように甘い煌めきを湛えた瞳を見つめ、ずっと大切にしてきた想いを明かす。

ちゅっ♡と音を立てて自ら彼に口付ければ、ゴキュリと彼の喉が鳴った。そしてそれと同時に喉仏が上下する。

「ああ、俺も好きだ……。もう、お前以外考えられない」

「……っ♡うれしい……。♡」

私の右横に横たわったアレスターさんが、仰向けのままである私の頭の後ろに左腕を差し込む。

腕枕だ。至近距離に迫った整った顔が、そっどこめかみに口付けてくれる。

頭皮に感じる、弾力のある筋肉の感触。それにうっとり浸って

いると、彼の右手が私の肌を擦りながら、くだっていった。

「……あっ！んっ」

「ああ……♡」

ヒクヒクとしている入り口を、表面の硬い指が撫でている。

その感覚に奥がむずむずとしていると、そのままくるくると円を描くように入り口を擦られた。

「可愛いな、アデリー。トロトロだ……」

「んっ♡んっ！」

パクパクと小さな口が開閉して、それを偉いと褒めるように優しく指の表面で縁を撫でられる。

こめかみに口付けられるのと同時に、中がキュンと甘く痺れた。

「……あっ、はいっ、て……♡」

「ああ。俺の中指が、お前の中にゆっくりと入っていくぞ」

今度は目尻に口付けられて。最大限甘やかされながら、狭い蜜道に指を埋められていく。

ズリズリと内壁を擦りながら、慎重に入り込んでくる感覚。

彼はどこもかしこも大きいから。

指すらも太くって、たった一本でも少し苦しい。

「ははっ、一本でギチギチだ……♡」

「ふっ、んうっ、んく……っ」

密着している体が、ぶるりと震え上がった。

必死に呼吸を繰り返す私の口に、大きな口がかぷりと食らい付く。

「ん、んっ♡なあ、初めて……？ん……♡」

「んむっ♡う、んっ♡そおっ♡む、んうっ♡んん……っ♡」

口付けの合間に問いかけられて。おずおずと頷けばまた、彼の体がぶるりと震え上がった。そうしてもっと、熱烈になった口付け。

「はっ、はっ、んむっ！んぢゅっ、あうゝゝっ♡♡」

口内をベロベロに舐め回されながら、奥まで入り込んだ指でゆったりと中を擦られる。

彼の指は内壁を常に優しく撫で、時には優しく搔き、時には軽く押し上げていた。そうして狭い蜜道を丁寧に、押し広げていく。

「あんツ!? ふんツ、ンツ！」

「んっ、ちゅっ♡んゝ……♡ちゅっ♡」

彼の親指だろうか。何かにグリッ♡とクリトリスが押し潰されて、下腹部から脳天まで、強烈な衝撃が突き抜けた。

ヒクヒクと戦慄く腰。それに構わず、団長の指はゆったりと中を押し広げ、クリトリスを捏ねる。

「んやっ！あうっ！んんん……ッ！」

「ぢゅるっ♡ん、ん……♡ぢゅぢゅっ♡」

口内では分厚い舌が我が物顔で暴れ回り、奥で縮こまっていたはずの私の舌がじゅるじゅると舐めしゃぶられている。

内頬すら念入りに舐められていて、度々内側から頬が、もごもごと膨れていた。

「はあ、段々と広がってきたな……♡」

「あっ、あゝっ！んあっ♡あ、んうう……っ♡♡」

膣内からはいつの間にか、ねちねちといやらしい音が立っていた。ひっきり無しに快楽の芽を刺激されるせいで、腰が跳ねて仕方ない。

「ふは、こっちもクリと同じで、ビンビンだ……♡」

「きゃんっ！ふあ……っ？」

腕枕をしている彼の左手が——動いたと思えば、左胸に鋭い衝撃が走った。

遅れて胸の先端が弾かれたのだと気付くが、それはあくまで、始まりでしかない。

「コリコリで、可愛い乳首」

「あっ！あっ、あっ！ふあ、アツ♡♡まつ、どれか、やめてっ」

ピコピコと指で乳首を弾かれながら、反対の手の親指ではクリトリスを擦られ——大胆に動き出した膣内の指は、ぐちゅぐちゅと中を掻き混ぜる。

「やあっ♡♡やつ、あん……！ぜんぶ、は、だめ……っ」

「はは、そうか。だめ、か……♡」

駄目だと言ったら、頷いてくれた。

だから納得してくれたはずなのに——

より執拗に責め立てられて、目の前がチカチカし出す。

「あっ、らめになるっ♡へんなの、くるから……！」

「ああ……いいぞ。俺の前で、変になってくれ♡♡」

コリコリ、クリクリ。

押し潰されて、捏ねられて。時にはトントンと叩かれるクリトリス。お腹の奥には、どんどんと熱が溜まっていつている。

それがもうすぐ、弾けてしまいそうだった。

「ふあ、んぎゅッ♡♡♡あ、ひっ♡」

「ははっ♡ぎゅうっ、て締まった……♡」

イヤイヤとかぶりを振ればキュッ♡と乳首を摘ままれて。狭くなつた蜜道を、長く太い指でぬこぬこと擦られる。

「可愛いなあ、アデリー。愛してる。愛してるよ……」

「おッ♡お、あ……ッ♡♡」

ビリビリするような低い声で囁かれて、また唇を奪われた。

小さく痙攣する舌をねつとりと舐められて、ぢゅるぢゅると吸わ

れる。

「ふぁッ!? …… あ、おんッ！」

「ん、キツキツ……♡」

ずるりと抜けたと思ったら、太くなつて戻ってきた指。

それにびっくりして開いた口に、分厚い舌を差し込まれた。
喉の手前——舌の根元付近を、ねちねちと舐められている。

「うぶッ♡お、えッ♡♡まつ、あぁッ♡♡」

えずき、太い指の束に喘ぎ、腰を痙攣させる。

そうしていると段々と——段々と。

お腹の中でグツグツと煮立っていた熱が、更に膨れ上がって——

「あ、んぐッ♡アッ、あ、だめっ、んうゝゝゝっ！」

「……はっ♡♡」

お腹の中が、ギチギチで苦しいと思っていたのに。

乳首を摘まんて捏ねられ、クリトリスもいじめられてめっちゃくちやに気持ち良かったのに。

結局私は、お股への圧迫感と快感で達してしまった。

「よくイけました。えらい、えらい……♡」

「はっ、はっ、あっ」

絶頂して引き絞る膣内を宥めるように優しく擦られ、クリトリスはトントンと叩かれる。

面白いほどに足腰が跳ね、脳内が白く霞んだ。

「あん、あっ、お……っ」

硬くなった乳首をピンピンと弾かれながら、またしても口内をねつとりと舐め回される。

お腹側にある浅いところをぐりゅぐりゅと抉られて、目の前まで

真っ白に――

「はひゅ——ッ」

「おお……♡」

ビシャツと音がして、触れたままの唇から歓声が漏れた。

「あっ、あっ」

「ん。上手、上手……」

タシタシと泣き所を叩かれて、ビシャツ、ビシャツと立て続けに音が鳴る。

何も考えられなくて。無意識の内に突き出した舌を、丁寧にしゃぶられていた。

「ぁんっ、お、んっ」

今や乳首は摘ままれて引き伸ばされ、コリコリと弄られている。クリトリスは潰されたまま摩擦され、包皮が捲れているのかあまりにも刺激が強い。

「今度は三本。挿れるから、力を抜くんだぞ……♡」

「あゝお……ッ！ふと、お、お、い……ッ♡♡♡」

突き立てられてぎゅちちちッ♡と入り込んできた指の束に、目前で光の粒が弾ける。

苦しいのに気持ちいい。大きくて、気持ちいい――

やっぱり思考は、まともに働かない。

「もお、もお、はいんない……っ」

「うん、頑張ろうな……？」

彼の首に抱き着いて必死に乞うのに、指はどんどん入ってくる。

太い。大きい。苦しい。こんなの、すぐにイツちゃう。

「あっ、あっ、あっ！イツ、くう……！んん……ッ！」

「……はっ♡アデリー太くて苦しいのに、イツちゃったなあ……♡」

抱き着いたせいで、お腹に彼のものが当たっている。

私は絶頂の余韻でびくびくと全身を痙攣させながら、その大きさにキュンッ♡と奥を疼かせた。

「はっ、あ、おお……ッ♡おっ」

ちよっただけ強引に入り込んだ三本の指が、これまでより性急に中を拡げていく。

自分の股の間からじゅぷじゅぷと恥ずかしい音が鳴っているのに、鼓動はドキドキと早鐘を打っていた。

そうして二度目の絶頂の余韻が薄れていき、かと思えば次に向けてどんどんとお腹の奥に熱が蓄積していく中で。

私はふと、気付いてしまった。

（きつともう——我慢できないんだ）

甘く私の額に口付けているアレスターさんの限界を察して、私はぎゅぎゅっ♡と彼の指を締め付けた。

チラリと視線を上げれば、粘着質な熱を纏った金の瞳が私を射貫く。

「……あっ、まつ、イ、く……っ♡」

求められながら、乞われながら。彼の体で中を擦られる。

それはこんなにも気持ちいいことなのかと。驚きながら、私はまた絶頂を迎えた。

「あ、あっ、まつ、て♡いま、イツて……！」

「……っ、……」

興奮したように私の胸を揉むアレスターさんは、本当に余裕がなさそうだ。

私のこめかみに唇を当てたまま、達したばかりで収縮する膣内をぐちゅぐちゅと掻き混ぜている。

「あっ、も、また、いっぐ……！」

「……はっ、ああ……っ」

ゴリ、と強めにクリトリスを潰されて、ブリッジのように腰を浮かせば、絶頂と共にビシヤッ♡とまた何かが吹き出た。

「はーっ、はーっ、あ、お……♡」

「……ふーっ」

ずるんと中から指が抜けていって、アレスターさんがその手を払うとパタタツと音が鳴った。

「ふーっ、ん、ぐ、ふーっ」

「はあ……っ」

そっと寝台へ仰向けに寝かされ、彼の温かな体が離れていく。

息を整えながら薄目を開けて様子を窺えば、アレスターさんは自身の右手を口につけて、ねっとり舐め上げていた。

「んっ、ぢゅ……っ♡ん……♡」

「はっ、はえ……？」

己の指を美味しそうにしやぶりながら、膝立ちでシーツの上を移動するアレスターさん。

私は状況が飲み込めずに首を傾げて、それから彼の左手で大きく足を開かされた。

「あ……っ？」

未だ念入りに指をしやぶっている彼が、私の足の間を陣取った。ぽかんとしたまま顔を見上げれば、私の目をじっと見つめて、指に付着した透明の液体を舐め取る憧れの団長様――

「……おっ？」

あまりにもいやらしい光景に呆然と見惚れていると、入り口に何か熱くて硬いものが触れた。

ねちねちと擦り付けられ、やがて――

「——ふ、え……ッ!? あ、やあ……!」

「っ、はー……っ♡」

入り口に圧がかかったと思えば、グポンッ♡と大きなものが入り込んでしまった。

そしてそのままズルズルと、容赦無く入り込んできてしまう。

「あッ、おおきい……ッ! おおきい、の、おッ♡♡♡」

「あ、キツツ……♡」

あまりにも大きすぎると。これではただ苦しいだけだと、思っていたのに。体が勝手に極めて、頂きに到達した。

「ああ、もしかして……挿れただけで、イッたのか? はは、はっ♡それはすごいな♡」

「ふーっ♡ふぐ、フーッ♡♡おッ!」

大きな大きな熱塊が、即座に屈服した膣内にどんどん入り込ん

でくる。

限界まで皺を伸ばされて拡張された内壁を擦られることが、こんなに気持ちがいいなんて。

未知の世界に踏み込んだ私は全身を痙攣させながら、後頭部をシートに擦り付けた。

指をしゃぶり終えたアレスターさんが、私の顔の横に手を突く。

そうして下半身同士を次第にくつつけていくと、やがて――

――ばちゅんっ♡♡♡

「――あゝあんッ！」

「あー……っ、先端、ごちゅんって……♡」

一番奥の行き止まりに先端がぶち当たり、そこで動きを止めた。

一際大きな衝撃が走り、ハクハクと口を震わせていると、はらりと上から、銀の絹糸が垂れてくる。

「アデリー……♡」

「お、お……っ？」

左肩を擦る銀の束。それにパチパチと目を瞬かせていると、自分の体の上に影が落ちていると気付く。

そう。ねつとりと唇を舐められる私は、今。

大きな体軀から差す影にすっぽりと体を覆われ、足だけ左右にはみ出している状態だった。

「ん、ん……♡」

「ふぎゅう……っ！」

もっと奥まで迎え入れてくれと言うように。グリグリと腰を押し付けられて、あまりの圧迫感に喘ぐ。

限界まで振じ込まれているのに、彼の鼠径部は私の体にくっついていない。

「らめ、ら、め……っ」

「んー？」

このまま押し付けられたら壊れてしまうと、青褪めて厚い胸板を押すが、ビクともしない。

それどころか愛おしげに顔中へ、口付けられるばかりだ。

「おおっ、ふっ♡おおっ、んぐ……っ！」

「はあ、きもち……♡」

相も変わらずごちゅごちゅと行き止まりを押し上げられて、目前では星が散る。

もう入らないとかぶりを振れば、何故だか優しく頭を撫でられた。

「……ふう。そろそろ、馴染んだか……？」

「ひ、あ……？」

チラリと下に視線をやったアレスターさんが、そろりと腰を動か

して――

ズリユツ♡ぼぢゅぢゅぢゅツ♡♡

「ふゃツ!? あ、ぐ、んんんー……ッ!!」

容赦無く内壁を擦りながら、怒張が抜けていった。

「……はっ、大丈夫、そう、だなっ!」

「はひっ♡はひいっ♡♡……あゝおっ!?」

そして全て抜け落ちる寸前で、ぐぢゅっ♡ずろろろっ♡♡ぐぢゅ♡と、振じ込まれた。

「お、ふう……っ♡」

「ふぎゃんツ!」

ばぢゅんっ! と先端を行き止まりにぶつけられて、衝撃でビクン! と体が跳ねた。

涙で滲む視界はバチバチと弾ける光を見つめ、たまに黒く染まる。

ガクガクと足は痙攣し、大きく開いたままの口には熱い舌が這っていた。

「お……ッ！ まっ、でえ……っ！」

ずくにまた、ずにゆ、ぐぢゅぢゅ……っ♡と抜けていく熱塊を慌てて引き止めようとするが、どうすることも出来なくて。

「ふああん……ッ！」

ぶぢゅっ♡と音を立てて引かれて、ばぢゅんっ！と叩き付けられた腰に、私は啼く。

「はーっ、くっ♡はーっ、すっご……♡」

「やっ、あんっ！ やあっ♡♡やらあっ」

やだと言ってもだめと言っても始まってしまった律動は止まらず。ひっきりなしにお腹の奥へ、重たい衝撃が走る。

じゅぼじゅぼと太い幹で擦れる内壁はどこもかしこも気持ちよく

て。ぐるん、と上向いた目をじっと見つめられ、慈しむように目尻に口付けられた。

「む、いっ♡♡むい、なのおっ♡♡♡♡」

「ん……？ はは、無理じゃ、ないさっ♡イクイク、してごらん？」
「ヒ……ッ！ あ、あ、あーッ！」

無理と言ったら、もっと激しく揺さぶられて。必死に頭を左右に振っていると、お腹の奥で熱が爆発した。

「ゝあぎゅん……ッ!! お、ふお……っ♡♡♡♡」

「あっ、きつ……♡ふっ、ぐ……っ！」

体がふわりと浮いた感覚があつて。ビシャツと音がして。

ゴツンッ！と最奥を殴られ、またビシャツと音がした。

結合部から、お尻まで温かなものが流れていく。

私は頭が真っ白。それなのに、一度は止まった律動が再開してし

まった。それを受け入れるしかない私は、衝撃に舌を突き出す。

「んやあ、あぁうううっ!! ぃっ、いつ、イツ、ぢやあぁうッ!!」
「……あっ! しまつ、イ……ッ!」

ブルブルと全身を激しく震わせ——今までで一番深くて重い絶頂に到達すると、体の奥の奥、胎内にドクリと熱いものが吐き出された。

「あゝっ♡♡あぢゅっ♡♡あぁっ♡♡」

「はっ、ぐ……！ はっ、はっ、まだ出る……！」

夥しい量の熱液を子宮の中に注がれて。私はビクビクと体を痙攣させ、悶えていた。

上へ上へと体が逃げようとするが、逞しい腕に動きを阻害される。今やお尻はシートから浮き——子宮を下にして、しっかりと熱いものが注がれていた。

「ふう……♡ いっぱい出たな……♡」

「あおッ♡ は、え、お……♡」

たっぷりと液体を飲み込んだ子宮を褒めるように、入り口にキスをした先端をグリグリと押し付けられる。

その上で小突かれれば、私はパチパチと泡が弾けるように、何度も軽い絶頂に至った。

「なあ、アデリー。このまま俺と付き合って、結婚するだろう……？ 子供は何人ほしい？」

「はっ、はっ、お……っ♡ ふ、う……っ♡」

頭がくらくらして、酸素が足りない。

ごっちゅ♡ごっちゅ♡としつこく行き止まりを突かれて、気持ちよくて辛い。

——そういえばどうして、出したのに硬さが衰えないのだろう。

「このまま取り敢えず、一人目は作ろうな……♡それから、すぐにも一緒に住もう♡」

「あッ、しよれ、やあっ！あ イッぐ……！」

浅いところを圧迫するように腰を押し付けられて、たまらず即イキする。気持ちがよすぎて、頭がどうにかなってしまいそうだった。「寮の周りに俺以外の男が入れないように結界を張っているとは言え、四六時中監視できてるわけじゃないからな」

「おッ♡おッ♡おッ！」

次第に激しく、そして間隔が大きくなっていく律動。

パンパンと触れ合う肌が乾いた音を立て、余っていたはずの根本も今では、全て私の中に振じ込むことができている。

「石鹸も、香水も、菓子も……少しずつ俺の魔力を混ぜているから、不埒な輩は触れることさえ出来ないと思うが……」

「イツく……！いくっ、いぐのおッ♡♡やら、い……ッ!!」
擦られる場所がどこもかしこも気持ちよくて。

立て続けに連続で達して、今や私は息も絶え絶えだ。

「チッ、下心さえなければ男でも触れることが出来るってのが腹立たしい」

「ひゃ、あぁあ……！くり、いやぁ♡♡♡」

強烈な抽挿に子宮内から白濁が溢れ、それをぐぢゅぐぢゅと泡立てられていると、クリトリスまで刺激され始めてしまった。

即座に達して引き絞る膣内が、尚も容赦無く抉られる。

「……一緒に住んだら、食事にも全部、俺の魔力を混ぜて……♡隅々まで、俺で満たしたいな♡ああ、大丈夫。悪影響は無いさ。ただちよつと……孕みやすく、なるだけだっ♡うっ♡♡」

「あっぐ……！おッ♡♡♡……んおっお……ッ!!♡♡」

ゴツンツと叩かれて、どぷうつ♡と熱いものを吹きかけられた行き止まり。

またしてもダクダクと灼熱を注がれて、泡立った二人分の体液にまみれた膣内が、ヒクヒクと収縮する。

「……っ、はあ……。ああ、でも……。結婚してすぐは、やっぱり二人きりがいいかもしれないな。ああ、きっとその方がいい」

「ああおー……。あー……。あー……」

ふわりと下腹部が熱くなって、よし、と呟く声が聞こえる。

「ん、これで妊娠しない。きちんと避妊の魔法を使ったんだ。……褒めて、くれるか？」

「ああ……。？」

ちゅっ♡と唇を吸われて、スリスリと頬に頬擦りをされている。

「なあ、褒めてくれ。アレスターさんはすごいねって」

「す、ごい、ね……?」

ふははっと嬉しそうに笑って、大きな口が私の口を食べる。
体内に埋まったままの熱は、少しだけ萎んでいた。

——けれど口付けを交わす間に、ムクムクと大きくなっていった
しまう。

「……?……?……?」

「んちゅっ♡ははっ♡それじゃあ、これからは恋人同士のラブラ
ブセックスをしようか♡なっ? いいだろう?♡♡」

コテンと首を傾げた私に彼はにっこりと嬉しそうに笑って。雑に
髪をほどくと、私の体を抱き締めてぐるんと上下を入れ替えた。